

自然教育園の動物目録の追録と 稀種動物の目撃記録 (9)

久居 宣夫*

Notes on Newly or Rarely Observed
Animal Species in the Institute
for Nature Study (9)

Nobuo Hisai *

はじめに

今回は、1996年1月～1996年12月に新たに生息が確認されたり、目撃された種あるいは前報（久居、1996）までに記録がもれた種について報告する。稀種については、「動植物目録」（国立科学博物館附属自然教育園、1984）中で、r：“稀”，または（r）：“古い記録はあるが、現在未確認の種”とされている全ての種を対象にしたが、これら以外にも最近特に個体数や目撃記録が著しく減少した一部の種も対象とした。

なお、学名および和名などは上記の目録に準拠した。また、カッコ内の日付は目撃あるいは捕獲した西暦年月日と目撃または捕獲地点および目撃者、捕獲者名を示し、氏名のない場合は著者の記録によるものを示す。

本報告をまとめるにあたって、種々のご教示と同定をいただいた国立科学博物館動物研究部の大和田守氏、同友国雅章氏、神奈川県環境科学センターの野崎隆夫氏ならびに日頃より貴重な記録を提供していただいている日本野鳥の会の守田洋氏をはじめ、情報を提供して下さった方々に感謝の意を表する次第である。

1. 追 録

Arthropoda 節足動物門

Insecta 昆虫綱

Losbanosia hibarensis Matsumura アヤヘリハネナガウンカ（半翅目 ハネナガウンカ科）（1996.9.28 インセクタリアム）

インセクタリアム（図1参照）入口付近の網戸に止まっていた2個体のうち1個体を捕獲した。

本種は体長約5mm、前翅長11～12mmの美しい種で、本州・四国・九州の山地に生息する稀種であると

* 国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum

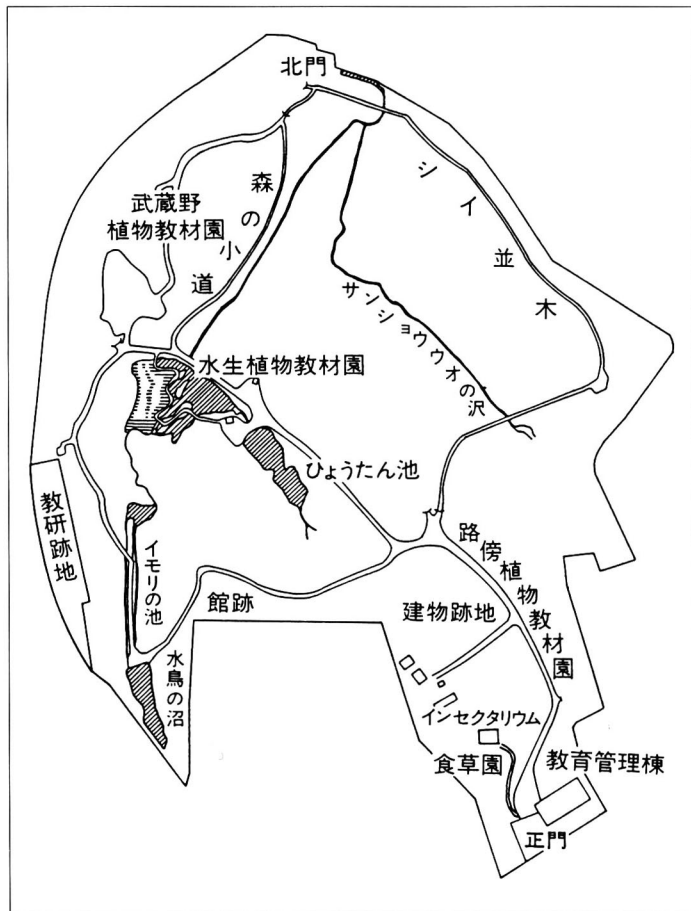


図1 自然教育園概略図

いう(江崎, 1950; 石原, 1965)。

幼虫は食菌性で、キノコ類を摂食して発育・成長し、山地でも時として多数の個体が見られることもあるが、都市の中の緑地での発生は珍しいとのことである(友国氏のご教示による)。

なお、成虫の静止姿勢は前翅を斜め前方に約120度の角度に広げ、やや持ち上げて止まる習性を持つ。

Percnia albinigrata Warren
ゴマグラシロエグシャク(鱗翅目 シャクガ科) (1996. 8. 9 あずまや付近の路傍 桑原香弥美氏)

水生植物教材園際にあるあずまや付近の路傍いた個体を桑原氏が捕獲、大和田守氏によって本種であることが確認された。

本種は関東以西の本州・四国・九州などの平地や低山地に生息する普通種であるが、本園では未記録であった。

幼虫は本園にも生育しているクロモジ・ダンコウバイ・ヤマコウバシなどのクスノキ科に寄生し、6月中旬～7月上旬と9月中旬～10月上旬の2回発生する(井上, 1982; 中島, 1987)。

2. 稀種の記録

(1) 昆虫類

Cryptotympana facialis facialis Walker クマゼミ(半翅目 セミ科) (1996. 8. 23 現業舎前 桑原香弥美氏)

本種は例年夏季に2～3回鳴き声が聞かれるが、1996年はこの記録のみであり、飛来個体が例年より少なかったように思われる。

Phryganopsyche latipennis Banks マルバネトビケラ(毛翅目 マルバネトビケラ科) (1996. 10. 30 サンショウウオの沢) 野崎隆夫氏同定

本種はライトトラップによって雌雄の成虫が採集されたものである。幼虫はサンショウウオの沢より採集されており、それに基づいてすでに記録はされている（久居，1987）が，成虫による確認はされていなかったもので，ここに改めて記録しておく。幼虫は落葉が堆積した川底に見られるが，生息密度は低い。

なお，本種は従来トビケラ科に所属していた（例えば津田・赤木，1962；桑田，1965など）が，近年独立した科として扱われる（谷田，1985）。

Papilio helenus Linnaeus モンキアゲハ（鱗翅目 アゲハチョウ科）（1996.5.14 食草園；同7.16 武蔵野植物教材園 大澤陽一郎氏）

5.14の記録は食草園付近に生育しているハナダイコンに訪花し，吸蜜している新鮮な個体を目撃したものである。

Narathura japonica Murray ムラサキシジミ（鱗翅目 シジミチョウ科）（1996.3.28 インセクタリウム裏）

越冬から覚醒したばかりと思われる個体がインセクタリウム裏の枯れ草の上に止まり，日光浴をしているのを目撃した。本種はこの例のように，越冬後の早春に翅を水平に開いて葉上で日光浴をすることが多いという（福田他，1984）。

Rapala arata Bremer トラフシジミ（鱗翅目 シジミチョウ科）（1996.4.27 建物跡地 矢野亮氏）

本種は最近毎年のように目撃される。今回は建物跡地からの記録であるが，本園ではインセクタリウム付近で目撃されることが多い。

Parantica sita Kollar アサギマダラ（鱗翅目 マダラチョウ科）（1996.6.5 武蔵野植物教材園 守田洋氏；同7.21 食草園；同9.23 路傍植物教材園 矢野亮氏）

7.21の記録は食草園に植栽されているアベリアに訪花した新鮮な個体である。この個体は観察のため同日捕獲し，インセクタリウム内に放逐した。したがって，9.23の記録は全く別の個体が飛来したものである。

Neptis sappho Pallas コミスジ（鱗翅目 タテハチョウ科）（1996.10.17 食草園）

食草園付近を低く飛翔していた本種を捕獲した。

本種は「昆虫目録」（鶴田他，1952）に登載されているが，その後全く目撃記録がなく本園では絶滅したと考えられる。今回の記録は捕獲個体の翅の傷み具合や，前日に冬型の気圧配置によって北西の風が強く吹いたことなどから，近隣の地域で発生した個体が飛来したものと考えられる。なお，本園の北西に位置し，現在も本種が発生していると考えられる近隣地域としては杉並区・練馬区・板橋区などが挙げられる（西多摩昆虫同好会編，1991）。

幼虫の食餌植物は主としてマメ科のクズ・フジ・ニセアカシアなどであり（福田他，1983），この他ムラサキツメクサも知られている（西山，1988）。これらは園内にも多く生育しており，本園で本種が絶滅した理由は明らかではない。

本種のほかツマグロキチョウやツマキチョウなどは、都区内では武蔵野台地に孤立的に分布し、東京における生息環境は主として自然状態の河川敷あるいは川辺林が残る河川の周辺と考えられている(里山昆虫研究会, 1995)。本園ではツマキチョウが1984~1989年に再見されたものの(久居, 1987, 1989, 1990), それ以後再び目撃されなくなったことや, ツマグロキチョウも近年ほとんど目撃されなくなったことは, 周辺および園内の自然環境の変化などによって, 本園がこれらのチョウにとって良好な生息環境ではなくなりつつあることを示唆するものであろう。

Vanessa indica Herbst アカタテハ(鱗翅目 タテハチョウ科) (1996.10.17 食草園)

食草園のアベリアに訪花した個体を目撃。前年に続く観察記録となったが、本種はそれまで長期間記録されなかったチョウの一種である(久居, 1996)。

成虫はクヌギ・コナラなどの樹液にも集まるが、各種の植物にも訪花し吸蜜する(福田他, 1983)

Pryeria sinica Moore ミノウスバ(鱗翅目 マダラガ科) (1996.5.3 森の小道 大澤陽一郎氏)

森の小道のマユミの幼樹に多数の幼虫がついているのを大澤氏が見つけ、筆者によって本種と確認された。本種は1984年に発行された「動植物目録」(国立科学博物館附属自然教育園, 1984)の正誤表の末尾に追録として記録されているが、その後は記録されていない。

本種は本州~九州まで広く分布する。幼虫はマサキの害虫としてよく知られるが、マユミ・ニシキギ・ツルウメモドキなどのニシキギ科の植物にも寄生する。都内の森林緑地では、マサキ以外の樹種に幼虫が群生するのをときどき見かけるが、筆者は1992年4月に目黒区にある駒場野公園で、今回の記録のようにマユミに群生する幼虫を観察している。

本種は年1化で成虫は晩秋に出現する。卵で越冬して翌春ふ化し、幼虫は5~6月頃終齢となり、1枚の葉を丸めてその間に繭を作って蛹化する(井上, 1982; 中島, 1987)。

Cyphonocerus ruficollis Kiesenwetter ムネクリイロボタル(鞘翅目 ホタル科) (1996.6.8 三叉路付近, 同6.16 現業舎付近)

本種は1993年6月にも記録されており(久居, 1994), 個体数はすくないが園内で繁殖を繰り返していると考えられる。

(2) その他

Gekko japonicus Duméril et Bibron ニホンヤモリ(トカゲ目 ヤモリ科) (1996.7.6, 同7.19 教育管理棟内2階廊下, 同7.10 教育管理棟内実験室; 同8.28 正門前ベンチ 桑原香弥氏)

7月の教育管理棟内の記録は同一個体の目撃と考えられる。また、8月に目撃された個体は幼体であったという。

引用文献

- 江崎悌三. 1950. あやへりはねながうんか. 「日本昆虫図鑑」(石井悌他編), 310. 北隆館.
 福田晴夫他8名. 1983. 原色日本蝶類生態図鑑(II). 325pp. 保育社.
 —————. 1984. 原色日本蝶類生態図鑑(III). 373pp. 保育社.

- 久居宣夫. 1987. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(1). 自然教育園報告, (18):41-44.
———. 1989. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(2). 自然教育園報告, (20):1-13.
———. 1990. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(3). 自然教育園報告, (21):11-21.
———. 1994. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(6). 自然教育園報告, (25):29-33.
———. 1996. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(8). 自然教育園報告, (27):21-25.
- 井上寛. 1982. マダラガ科, シャクガ科. 「日本蛾類大図鑑第1巻 解説編」(井上寛他著), 291-296, 425-573. 講談社.
- 石原保. 1965. ハネナガウンカ科. 「原色昆虫大図鑑第3巻」(朝比奈正二郎他監修), 130. 北隆館.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 1984. 国立科学博物館附属自然教育園動植物目録. 118pp.
- 桑田一男. 1965. 毛翅目. 「原色昆虫大図鑑第3巻」(朝比奈正二郎他監修), 163-166. 北隆館.
- 中島秀雄. 1987. マダラガ科, ゴマダラシロエダシヤク. 「日本産蛾類生態図鑑」(杉繁郎編), 13-16, 81. 講談社.
- 西山隆. 1988. コミスジの食餌植物ムラサキツメクサ. 月刊むし, (203):38-39.
- 西多摩昆虫同好会編. 1991. 東京都の蝶. 200pp. けやき出版, 東京.
- 里山昆虫研究会. 1995. 多摩川中流域の丘陵部における里山昆虫の研究. 229pp.
- 谷田一三. 1985. 毛翅目. 「日本産水生昆虫検索図説」(川合禎次編), 167-215. 東海大学出版会.
- 津田松苗・赤木郁恵. 1962. 毛翅目. 「水生昆虫学」(津田松苗編), 112-148. 北隆館.
- 鶴田総一郎他. 1952. 国立自然教育園動物目録第1集昆虫綱. 国立自然教育園基礎資料, (1):1-42.(国立自然教育園).